



# 教育新報

第179号

今だからこそ  
心を一つに



教育学部同窓会長  
白杵 勇人

日ごろより同窓会活動にご理解とご協力を賜り感謝申し上げます。皆様のご支援のお蔭で、令和元年度に計画した諸活動を無事終えることができました。しかし、令和元年度末から令和二年度初にかけての「新型コロナウイルス感染症拡大防止」のため、新潟大学の卒業式ならびに入学式を中止せざるを得ませんでした。また、新潟県内では、小中高・特別支援学校でも休校措置や分散登校の実施など、教育関係者にとって今までに経験したことのない事態に直面していました。感染拡大防止のために日々ご尽力されている皆様に心より敬意を表します。

現在、新潟大学では、感染拡大防止の観点から、八月十二日（水）までの第一学期において、非対面のオンライン授業による特別対応を行っています。本年度入学した百八十名も大学のキャンパスで授業を受けられない状況です。

県内では緊急事態宣言解除を受け、六月一日からそれぞれの学校に元気な子どもたちの声や

笑顔が戻って来ましたが、まだまだ予断が許せない状況であるため、事業計画を審議する「評議会」を中止せざるを得ませんでした。今後も、三密を避けるため大勢が集まる会合の自粛はもとより、参加者の健康と安全面を第一に考え、九月の「同窓生の集い」の開催についても検討中です。詳細が決定次第、ホームページで情報提供いたしますので、ご覧頂きたいと存じます。

なかなか今後の見通しが立たない状況ですが、「会員相互の親睦と資質向上を図り、母校の発展に寄与すること」を目的とした同窓会も六十五年目を迎えました。母校の発展のために、今だからこそ心を一つにして取り組む所存ですので、ご理解、ご協力をお願いいたします。

最後になりますが、長年に渡り同窓会研修部長等でご尽力くださった駒澤一彦様が三月に他界されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

□本年度中止する事業

- ①「同窓会第一回本部会」5月
- ②「同窓会評議会」6月
- ③「同窓生の集い」9月
- ④「全学同窓会交流会」10月

昨年度から流行し始めた新型コロナウイルスの影響で新潟大学の卒業式・祝賀会が中止となりました。本年度になってもその勢いは衰えず非常事態宣言が全国に出されました。学校現場では長期の休業が余儀なくされ、新潟大学でも八月までは対面授業を行わないとの措置がとられました。

そうした状況を勘案して、当同窓会におきましても、感染拡大防止の観点から年度当初の「本部会」「評議会」を中止いたしました。

現在、学校は再開し、日常を取り戻したかに見えますが、まだまだ油断できません。そこで、誠に残念ではありますがありますが、「同窓生の集い」「全学同窓会交流会」の中止を決定いたしました。

11月以降に計画している「カミングホームデー」（11月予定）「教育学部教職員との懇談会」（1月予定）については、今後の状況を見定め実施の可否を決定して行きたいと考えております。

ご理解の程よろしく願っています。

おしらせ

情報交換  
情報発信

新潟大学  
教育学部同窓会  
ホームページ



# 令和2年度 専門部活動計画

## 研修部

部長 小林 由希恵

## 広報部

部長 保坂 章夫

## 組織部

部長 長沢 剛

## 交流部

部長 永井 高志

### 一 今年度の事業について

研修部では、同窓生が親睦を深めるとともに自己の人間的な資質を高めることを目的に、例年「同窓生の集い」事業を計画、実施しております。令和2年度につきましても、新潟市教育委員会教育長前田秀子様からご講演をいただく予定で計画を進めてきました。コロナウィルス感染予防策を講じながら、何とか実施する方途を探りましたが、この度、白杵同窓会長より、次の四つの視点から今年度の「同窓生の集い」中止のご判断をいただき、中止の決定に至りました。(中止判断の根拠)

- ① 新型コロナウイルスの終息の目処がたないこと
  - ② 参加者の不安を拭い得ないこと
  - ③ 参加者の健康安全の確保、対策強化が難しいこと
  - ④ 三密を避けられないこと
- 恒例である「同窓生の集い」の実施が叶わず、大変申し訳ありません。(前田教育長様を訪問させていただいた際の訪問記を10ページに掲載しております。)

### 二 来年度に向けて

今年度実施することが叶わなかった前田教育長様の講演会を令和3年度「同窓生の集い」として実施する予定です。詳細は来年度ご案内いたします。どうぞ、ご期待ください。

### 一 基本方針

- 同窓会の活動や会員の声、大学との連携を密にした広報活動を推進する。
- 四色刷りカラー印刷を継続して発行する。

### 二 活動内容

- 「教育新報」年間二回発行
- 第一七九号(七月二十日発行予定) 巻頭言、令和2年度専門部活動計画、同窓会本部役員・支部長・学科代表一覧、令和元年度決算報告、令和2年度予算、大学コーナー、教職大学院実践報告、花鳥風月、「カミングホームデイ」の広報、特別企画「先輩を訪ねて」
- 第一八〇号(二月二十日発行予定) 巻頭言、花鳥風月、「大学との懇談会」等の報告、学科や支部の活動紹介、学校紹介(小・中・特支学校)、会員の広場、大学コーナー

### 三 お願ひ

○ 今後の感染症拡大等の状況により活動内容が変更になる可能性があります。ます。

### 一 活動の重点

- ① 事務局及び学部、教職大学院教育実践学(研究科)と連携し、会員の連帯意識の高揚に努める。
- ② 事務局、支部長、学科代表と連携し、永年会員となる学生及びその保護者、既に永年会員である現職に對して、同窓会員である意識を高めるとともに、同窓会活動への理解を得るように努める。
- ③ 各専門部と連携し、各事業の組織運営に関わるサポートを行う。

### 二 活動の内容

- ① 支部長会及び学科代表者会の開催
  - ・ 例年、評議会終了後、学科代表者会と支部長会を同時時程で開催していたが、今年度は行わない。
  - ② 交流部事業カミングホームデイの参加者集約等に関するサポート。
  - ③ 研修部事業講演会での講演会開始前におけるスライドショー等のサポート。
- ② その他
  - ・ 教職退職者に対して、事務局と連携し、継続の意思を確認する活動を進める。

交流部は、本年度「カミングホームデイ」の内容をさらにバージョンアップします。

### 一 「カミングホーム・デイ」の実施

(令和2年11月14日(土))

卒業生・修了生の現在の状況や、学部・教育実践学(研究科)への要望、同窓会活動への提言等、昼食会を通して親睦を深める。

### 二 新潟大学教育学部・教育実践学(研究科)教職員と同窓会役員との「懇談会・懇親会」の開催

(令和3年1月21日(木))

- ・ 学部・教育実践学(研究科)と現場の双方の現状を報告し合い、要望等を述べ合いながら交流を深め、意思の疎通を図る。
- ・ 学部・教育実践学(研究科)の現状と主な取組
- ・ 卒業生の就職状況と現場との連携
- ・ 同窓会活動への提言等

### 三 各種教育関係機関、他団体との連携の促進

全学同窓会への参加を促す。

令和2年度 同窓会本部役員

<任期は令和1年度～令和2年度>

☆印は新役員

役職	氏名	支部	校名など	
会長	臼杵 勇人	新潟東	自宅	
副会長	齊藤 裕子☆	新潟秋葉	結小学校	
	関川紀美子	新潟田	藤塚小学校	
	瀬藤 雄二	長岡西	大島小学校	
	渡邊 勝	新潟北	岡方中学校	
事務局	杉山 和敏	新潟西	教育学部同窓会事務局	
	高橋 円			
専門部	研修部	◎小林由希恵	新潟南	味方小学校
		○小泉 慎子	新潟中央	鏡淵小学校
		志田江利子	新潟東	牡丹山小学校
		間 裕太	新潟北	早通中学校
	広報部	◎保坂 章夫	新潟西蒲	岩室小学校
		○音田 和行☆	新潟西	新通つばさ小学校
		若月 利春	新潟西蒲	漆山小学校
		高橋 新一☆	新潟南	味方小学校
	組織部	國井恒太郎	新潟中央	紫竹山小学校
		◎長沢 剛	新潟秋葉	矢代田小学校
		○古井丸裕三	新潟西蒲	巻北小学校
		樋口 大輔	新潟西蒲	曾根小学校
	加藤 雅晃	新潟東	桃山小学校	

役職	氏名	支部	校名など	
専門部	交流部	◎永井 高志	新潟江南	早通小学校
		○小泉 浩彰	新潟中央	新潟市教育委員会
		古川 智子	新潟中央	鳥屋野小学校
		細田 英海	新潟西	小針小学校
		八坂 剛史	大 学	新潟大学教育学部
監 事	松野 孝雄	新潟西蒲	曾根小学校	
	松井 裕美	新潟西蒲	和納小学校	
	牧野淡紅恵☆	新潟北	濁川中学校	
顧 問	中川 幸次	県 外	自宅	
	江口 直禎	新潟中央	自宅	
	大関 雄策	新潟中央	自宅	
	磯辺 浩昭	新潟田	自宅	
	藤井 保男	新潟東	自宅	
	斎藤寿一郎	新潟東	自宅	
	佐藤 重勝	新潟秋葉	自宅	
	安達 徹	新潟秋葉	自宅	
新潟大学全学同窓会	理 事	臼杵 勇人	新潟東	自宅
		加藤 文子	新潟江南	自宅
	運営委員	山下あい子	新潟西蒲	自宅
		畠山 典子	新潟中央	新潟市児童センター
		岡村 浩	大 学	新潟大学経済科学部

令和2年度 同窓会学科代表

☆印は新代表

	学科名	学科代表	校名など
1	国 語	三村 孝志	猿橋中学校
2	地 理	西方 俊也☆	坂井輪小学校
3	歴 史 研 究 室	高橋 裕幸☆	東山ノ下小学校
4	経 済	小庄司一泰☆	白山小学校
5	哲 倫	清野 真輝	真砂小学校
6	社 会	土田 宏美	内郷小学校
7	算数(親話会)	小杉 洋一☆	今町小学校
8	数学(懇話会)	橋谷田 登	自宅
9	物 理	茂呂 良彦	紫雲寺小学校
10	化 学	栗林 操	須田中学校
11	生 物	八百板恵理子	小合小学校
12	地 学	佐久間州彦	安野小学校
13	英 語	春日 孝児☆	県立三条高等学校
14	音 楽	斎藤 隆	中野小屋中学校
15	美 術	永井 高志	早通小学校
16	保 健 体 育	小林 久哉☆	葛塚東小学校
17	家庭[萌木会]	長尾とし子	自宅
18	職 業 指 導	松村 明彦	自宅
19	教 育	山岸 真夫	自宅
20	教 育 心 理	岡田 義則	新潟市教育委員会
21	技 術	遠藤 寿紀	亀田中学校
22	特別支援教育	西山 有紗	附属特別支援学校
23	養教特別別科	稲月のぞみ☆	桜が丘小学校
24	幼 児 教 育	近藤 和徳	新津第一小学校
25	学社ネットワーク	小柳加奈子	自宅
26	生 活 科 学	遠山麻依子	白根第一中学校
27	生活システム	大森 山	糸魚川東中学校
28	健康スポーツ	大口 良平	根知小学校
29	書 道	岡村 浩	新潟大学経済科学部

令和2年度 同窓会支部長

☆印は新支部長

地 域		支 部	支部長	校名など
上 越	1	上 越	関 拓也	東中学校
	2	長 岡 東	川田 昌宏☆	中越教育事務所
	3	長 岡 西	小林 剛☆	下川西小学校
	4	三 条	近藤由紀子	旭小学校
	5	柏崎・刈羽	田村 芳彦	日吉小学校
	6	小 千 谷	稲田真砂美☆	総合支援学校
	7	加 賀 茂	国本 力	須田小学校
	8	十日町・津南	庭野 紀元	東小学校
	9	見 附	小林 雄二	見附小学校
	10	燕	櫻井 清隆	分水北小学校
	11	魚 沼	前田 明子☆	小出小学校
	12	南 魚 沼	阿部 一之☆	五十沢小学校
	13	弥 彦	松木 直子☆	弥彦中学校
	14	田 上	堀 和宏☆	田上小学校
	15	湯 沢	白井 恵子	湯沢小学校
	16	出 雲 崎	五十嵐 悟☆	出雲崎小学校
中 越	17	新 潟 北	竹田 暢美☆	岡方第一小学校
	18	新 潟 東	伊藤 紀幸	下山小学校
	19	新 潟 中 央	根岸 恵美	万代長嶺小学校
	20	新 潟 江 南	川又 健司	東曾野木小学校
	21	新 潟 秋 葉	滝澤 訓	荻川小学校
	22	新 潟 南	阿部 祐子☆	根岸小学校
	23	新 潟 西	椿坂 恭永☆	黒崎南小学校
	24	新 潟 西 蒲	高橋 治子	中之口東小学校
	25	新 発 田	小野沢謙一	七葉小学校
	26	村 上	鈴木 正美	村上小学校
	27	五 泉	石田 雄介	巢本小学校
	28	阿 賀 野	臼井 政之	笹神中学校
	29	胎 内	丸田 磨里☆	築地中学校
	30	聖 籠	近藤 幸栄	亀代小学校
	31	阿 賀 賀	金子 一郎☆	津川小学校
	32	関 川	中村 克行	関川小学校
	33	粟 島 浦	白井 拓巳☆	粟島浦中学校
佐 渡	34	佐 渡	嶋見 靖之☆	相川小学校

# 令和1年度 一般会計決算報告

(▲は、予算に対して減)

## 1 収入の部

項目	R1 年度収入額	R1 年度予算額	比較	摘要
1 繰入金	8,500,000	8,630,000	▲ 130,000	総合会計から繰入れ (3回)
2 雑収入	63,015	0	63,015	利息、宮園先生寸志、590 から 1000 円、各会欠席者戻し金等 (収入扱い)
合計	8,563,015	8,630,000	▲ 66,985	

## 2 支出の部

項目	R1 年度執行額	R1 年度予算額	残額	摘要
1 会議費	115,956	140,000	▲ 24,044	本部会、会計監査、評議会、役員会等
2 旅費	173,160	250,000	▲ 76,840	役員旅費、会員旅費
3 助成費	599,492	600,000	▲ 508	学科助成、支部助成、同期の会助成
4 事務局費	1,136,612	650,000	486,612	消耗費、電話代、光熱費、封筒印刷代、印刷紙代、機器更新、送料等
5 研修費	382,080	350,000	32,080	同窓生の集い企画運営費等
6 広報費	765,160	1,600,000	▲ 834,840	機関紙発行・封入代、パンフNo.9 作成
7 組織費	54,000	340,000	▲ 286,000	名簿メンテナンス代 (H30 年度分)
8 交流費	182,300	150,000	32,300	交流会企画運営費・経費、カミングホームデイの参加助成
9 大学・学生支援費	429,749	1,200,000	▲ 770,251	研究会バス助成、卒業制作展助成、卒業祝賀会助成等、カレンダー作成 教育学研究科助成、附属校研究発表会
10 奨学金	750,000	800,000	▲ 50,000	大学院教育実践学研究科現職院生奨学金 (5 × 150000)
11 全学同窓会費	571,290	620,000	▲ 48,710	負担金、全学交流会助成
12 人件費	1,800,000	1,800,000	0	事務局報酬 2 名
13 その他予備費	300,000	30,000	270,000	永年会費二重払い者返金 (詳細は別会計)
合計	7,259,799	8,530,000	▲ 1,270,201	

3 残高の部 8,563,015 円 - 7,259,799 円 = 1,303,216 円 \* 残金は、令和1年度総合会計へ繰り出します。

# 令和1年度 総合会計決算報告

(▲は、予算に対して減)

## 1 収入の部

項目	R1 年度収入額	R1 年度予算額	比較	摘要
1 繰越金	33,295,451	33,436,336	▲ 140,885	前年度繰越金 (第四総合口座前年度未残金)
2 学校会員会費	3,120,157	3,200,000	▲ 79,843	会費 - 振込手数料
3 個人会員会費	168,595	260,000	▲ 91,405	会費 - 振込手数料
4 永年会員会費	6,003,037	5,900,000	103,037	会費 - 振込手数料
5 繰入金	1,303,216	0	1,303,216	一般会計への繰出金に残金がたためたので、総合口座に戻した額
6 雑収入①	31	0	31	一般口座利息 (総利息から郵貯手数料等の総額を引いた額) 2942-2911 = 31
7 雑収入②	0	4,000	▲ 4,000	銀行定期利息など
合計	43,890,487	42,800,336	1,090,151	

## 2 支出の部

項目	R1 年度執行額	R1 年度予算額	比較	摘要
1 一般会計繰出金	8,500,000	8,630,000	▲ 130,000	
合計	8,500,000	8,630,000	▲ 130,000	

3 残高の部 43,890,487 円 - 8,500,000 円 = 35,390,487 円 \* 残金は、令和2年度第四総合会計に繰り越します。

大学教官の異動

(昨年度の七月以降)

◎学部を去られた先生

教授	小久保美子 (教職大学院)	令和二年一月末日 退職	
教授	郷 晃 (美術科)	令和二年三月末日 定年退職	
准教授	齋藤 暁史 (教職指導)	令和元年八月十一日 退職	
准教授	渡邊 道之 (数学科)	令和二年三月末日 転出	
准教授	小堀 彩子 (教育心理学)	令和二年三月末日 転出	
講師	清水 文博 (書道科)	令和二年三月末日 転出	
特任教授	川端 弘実 (教職大学院実務家教員)	令和二年三月末日 任期満了	
教授	吉澤 克彦 (教職大学院実務家教員)	令和二年三月末日 任期満了	
教授	古田 島津津子 (教職大学院実務家教員)	令和二年三月末日 任期満了	

◎新しくおいでになった先生

教授	田中 幸治 (音楽科)	令和元年七月一日 昇任	
教授	辻 照彦 (英語科)	令和二年四月一日 経済学部より学内異動	
准教授	山田 陽子 (英語科)	令和二年四月一日 経済学部より学内異動	
准教授	田中 誠二 (健康・スポーツ科)	令和元年七月一日 昇任	
特任准教授	田中 雄二 (学校教育)	令和二年四月一日 採用	
准教授	三村 友子 (美術科)	令和二年四月一日 採用	
准教授	坂井 純 (教職指導)	令和二年四月一日 採用	
特任教授	石川 治 (教職大学院実務家教員)	令和二年四月一日 採用	
特任教授	遠藤 英和 (教職大学院実務家教員)	令和二年四月一日 採用	
准教授	田村 和弘 (教職大学院実務家教員)	令和二年四月一日 採用	
准教授	森田 隆行 (教職大学院実務家教員)	令和二年四月一日 採用	

(敬称略)

## 令和2年度 一般会計予算

(▲は、前年度比較減)

### 1 収入の部

項目	2年度予算額	1年度予算額	増減	摘要
1 繰入金	7,900,000	8,530,000	▲ 630,000	総合会計から繰入れ
2 雑収入	0	0	0	
合計	7,900,000	8,530,000	▲ 630,000	

### 2 支出の部

項目	2年度予算額	1年度予算額	増減	摘要
1 会議費	60,000	140,000	▲ 80,000	本部会、会計監査会等
2 旅費	70,000	250,000	▲ 180,000	監査会旅費、全学同窓会旅費
3 助成費	600,000	600,000	0	学科助成、支部助成、同期の会助成
4 事務局費	1,000,000	650,000	350,000	ヤマト送料、電話・光熱費、封筒印刷代、紙代・消耗品等
5 研修費	390,000	350,000	40,000	集い企画運営費等(会場費、講師謝礼、参加助成等)
6 広報費	790,000	1,600,000	▲ 810,000	機関紙発行代、パンフNo.9作成
7 組織費	300,000	340,000	▲ 40,000	クリアファイル代金、研修部・交流部支援経費
8 交流費	210,000	150,000	60,000	交流会企画運営費、カミングホームデイ企画運営費
9 大学・学生支援費	1,300,000	1,200,000	100,000	研修会バス助成、卒業制作展助成、卒業祝賀会助成等、加ゾ-作成
10 奨学金	750,000	800,000	▲ 50,000	奨学生5名
11 全学同窓会費	590,000	620,000	▲ 30,000	負担金、全学理事会・運営委員会旅費等
12 人件費	1,800,000	1,800,000	0	事務局報酬2名
13 その他予備費	40,000	30,000	10,000	
合計	7,900,000	8,530,000	▲ 630,000	

## 令和2年度 総合会計予算

(▲は、前年度比較減)

### 1 収入の部

項目	2年度予算額	1年度予算額	増減	摘要
1 繰越金	35,390,487	33,436,336	1,954,151	前年度繰越金(第四銀行総合口座前年度末残金)
2 学校会員会費	3,200,000	3,200,000	0	会費 - 振込手数料
3 個人会員会費	170,000	260,000	▲ 90,000	会費 - 振込手数料
4 永年会員会費	5,900,000	5,900,000	0	会費 - 振込手数料
5 繰入金	0	0	0	*一般会計への繰出金に残金が出た場合、年度末に繰入
6 雑収入	0	0	0	銀行利息など
合計	44,660,487	42,796,336	1,864,151	

### 2 支出の部

項目	2年度予算額	1年度予算額	増減	摘要
1 一般会計繰出金	7,900,000	8,530,000	▲ 630,000	
合計	7,900,000	8,530,000	▲ 630,000	

### 事務局だより

#### □「書面表決」の報告

令和2年度は、「□ナウイルス感染防止の観点から六月の「評議会」を中止いたしました。そこで、評議員(本部役員・支部長・学科代表)の皆さんから書面表決という形でご意見をいただきました。本部役員28名、支部長29名、学科代表20名、総計77名の方々からご回答をいただきましたのでご報告いたします。

#### □第1号議案

「令和元年度会務及び決算報告」

#### □第2号議案

「令和元年度活動報告及び令和2年度活動方針(案)」

#### □第3号議案

「令和2年度本部役員(案)」

#### □第4号議案

「令和2年度予算(案)」

#### □第5号議案

「規約・規程の改正(案)」

※すべての議案について全員からご賛同いただきました。また温かなメッセージもたくさんいただきました。寄せられたご意見とともに同窓会の一層の発展に努めてまいりますのでよろしくご支援ください。

## 教育学部の

## 歩みと私

新潟大学教育学部教授・副学部長

堀 竜一

例年、大学の卒業式当日、教育学部国語科の謝恩会が開かれます。学部卒業生・大学院修了生が国語科の先生方を招待してくれます。最後に、花束に添えて感謝の言葉を頂戴し、先生方が卒業生・修了生を送る言葉を述べます。私はいつも、入学からその日までの卒業生・修了生との思い出を振り返りながら、挨拶の言葉を考えます。ところが、この春の謝恩会は（そもそも、卒業式自体が）中止となりました。言うまでもなく、新型コロナウイルスの影響です。伝えるべき言葉が行き場を失い、何とも残念で、心残りです。

新型コロナウイルス感染拡大の影響は、社会・生活のあらゆる領域に、多大な影響を与えています。大学・学部も、それこそ「未曾有」の対応を迫られています。私も、大学で、この三月までまったくその存在さえ知らなかったZoomというオンライン会議システムを用いて、非対面型のオンライン授業を行っています。ゼミや演習は、学生たちの顔を見ながら行えませんが、二百名を越える教養教育の授業などは、

文字通り「顔も見えない」履修者を相手に、音声とチャットのみでのやりとりで授業を行っています。

しかし、Zoomによるオンライン授業の良さもあります。音声、チャット、投票等の機能を用いれば、学生の反応が瞬時に把握できますし、何より、ブレイクアウトルームで学生同士の交流が容易に行えます。また、学生の授業出席率も、対面型授業では考えられない高さです。この非対面型授業は、対面型を前提とするこれまでの教育の在り方を根本的に変え、教育の大きな変革の流れを生み出していくのでしょうか。

今回、この「大学のコーナー」の原稿依頼があり、『教育新報』の過去の号を読み返してみました（いつも紙媒体で頂戴していますが、教育学部同窓会のホームページで、一六〇号以降のバックナンバーを見ることができず）。今も学部在籍している先生方、退職や転出をした先生方、懐かしい先生方のお姿を思い浮かべながら、力のかもった文章を読み返していると、これまで教育学部が直面してきたさまざまな問題・困難な課題等に、諸先生方がどのような思い・信念・情熱で対処してきたのが、手に取るように見えます。それと重ねて、その時々私の姿がどうであったのが、思い出されてきます。

私は一九九〇年に新潟大学教養部に赴任しました。教養部で四年間「文学」

の授業を担当し、教養部廃止にともない、一九九四年に教育学部（国語科）に引き取って頂きました。私の出身学部は文学部です（専門は日本近代文学です）。教育学部に移った当初、学生たちの気質・体質というか、マインドというか、何か固有の雰囲気新鮮な驚きを感じました。楽天的・前向き、善良で素直といった学生たちの姿です。ひねくれた文学部気質とはおおよそ異なり。しかし、それは驚きであると同時に、それこそ「天窓を開け放つた」爽快感でもありました。その受け止め方は今に到るまで変わりません。

生来、鈍重で（小学生の頃の綽名は「鈍重君」です）、引つ込み思案で、受身的な私は（よく「三無主義世代」と言われました）、外部からの働きかけにより、次第に「私」という密室から外に出て行くことになりました。外部からの働きかけとは、その時々で教育学部に課され、向き合うことになった諸課題と言ってもよいでしょう。私が教育学部に関わってきたこの二十数年の間にも、教育学部はさまざまな課題に直面してきました。

教育人間科学部への転換と、その後の新課程の募集停止、大学院教育学研究科の募集停止は、組織上、教育・研究上の大きな波でした。個別の授業に關しては、講義や演習・ゼミに加えて、「入門教育実習」「総合演習」「スタディ・スキルズ」「新聞活用教育（NIE）演習」といった科目を担当する

ことになったことが、私の考え方に大きな影響を与えました。「総合演習」は今後も廃止された科目ですが、「総合的な学習の時間」に対応する科目として開設されました（懐かしく思い出します）。課題発見・課題探求・課題解決、協働学習といった授業の理念・形態は、それまでの私の個人主義的な文学部的発想にはなく、おもしろみを感じ、今に至るまでいろいろな授業で模索しています。「総合演習」も、「新聞活用教育（NIE）演習」も、当時の森田龍義学部長に学部長室に呼び出され、担当するよう依頼されたことを思い出します。

教育学部に移ってから担うようになった役割として、附属学校の指導助言者、新潟市中堅教諭等資質向上研修等々の、教員研修のお手伝いがあります。「学校図書館司書教諭講習」もやはり、当時の生田孝至学部長に学部長室に呼び出され、担当を依頼されて行うようになった講習です。

これらは、教育学部が直面してきた困難な諸課題からすると、派生的な課題、その瑣末な影響かもしれませんが、たしかに私の教員生活に刻み込まれ、それによつて私は変えられてきました。それと同時に、その時々学生のみなさん・卒業生のみなさんとの学部での学びも、私の身体に刻み込まれていきます。そのことの意味を改めて考えてみて、これからの学部の歩みに生かしていきたいと思えます。

キャリア教育を軸とした社会に開かれた  
教育課程の編成に向けて  
学校経営コース  
倉島 陽介(新潟市立内野中学校)

私は、これまで深く掘り下げて考えることのなかった学校課題に目を向け、その改善に向けて自身の取り組むべき実践をデザインし、実施していくという本来教員としてあるべき姿を教職大学院の学びの中で再認識している。

この学びの核となっている課題研究における1年目の実践を紹介する。

私は教職大学院でキャリア教育について学び直し、勤務校で推進していくことで学校がよりよくなるであろうと漠然と考えていた。課題研究や教職大学院の多くの先生方から助言をいただき、様々な資料を読み返すことから、改めてキャリア教育が求められる背景を整理した。

また、課題研究のテーマを「キャリア教育を軸とした社会に開かれた教育課程の編成」とすることで、勤務校の課題だけではなく、これからの学校に求められる教育課題の克服にもつながるものと考えた。

課題研究を進める構想として次の3つのステップを

考えた。①特別活動を要とした振り返りの充実を図ることで、子どもたちは学び・体験の振り返りを蓄積、整理、統合する機会をもち、学びの往還が生まれ、自己のキャリア形成につなげる。②教科・領域との関連性や系統性の明確化を図ることで、単元や題材をキャリア教育の視点から可視化でき、勤務校で行われている多くの実践を価値づけ・再編成する。③地域と目標・目的の共有を図ることで、人的・物的資源の活用につなげ、目指すところを共有し、連携して子どもたちを育てる姿を実現する。

私は1年目の実践として、①を勤務校でどのように取り組んでいくかを考え、関係する職員に提案した。



2年目の実践では、構想にある②・③のステップを実行していく中で、子どもたちの成長を支えるために、学校・家庭・地域がどのようにして協力・連携して行けばよいのかを模索していきたい。

## 教職大学院生「1年目の実践報告」

「地域共育コミュニティ」の構築に向けて  
学校経営コース  
室橋 辰宏(新潟市立亀田小学校)

本実践は、保護者や地域住民と学校が目的を共有し、連携しながら社会に開かれた教育課程の協働編成に向かう在り方について明らかにすることを目的としている。

地域資源や地域人材を活用して、生活科や総合的な学習の時間において地域教育を進めている学校は多くある。しかし、その際保護者や地域住民は、学習を支えるボランティアとして、またゲストティーチャーとしての関わり方が多く、学校側からお願いされたことに応えている状況が多い。学校と地域と双方にとってメリットが生まれるような教育活動を展開するにはまだまだ至っていないことが課題である。

当校では、平成29年度より、地域教育コーディネーターと連携しながら、地域連携活動を推進するために校内での立案や調整役を行う地域連携推進主任(コミュニティ・ティーチャー)を分掌上に位置付け、地域の様々な団体の代表者とPTAの役員で構成された「亀っ子応援隊」という組織を発足させた。その応援隊と学校との会議で、地域教材を扱うことの多い生活

科や総合的な学習の時間の教育活動と指導計画の見直しを図ってきた。これらの取組を通して、地域との連携・協働を図るための素地づくりはできてきた。そして、教育活動の内容において、地域との関わりが密接になってきていること、地域や保護者の意識も変わってきていることなどが成果として挙げられる。

2年間の取組を振り返り、活動内容についての協議で終わっていることを課題と捉えた。社会に開かれた教育課程の協働編成における「地域・保護者と学校が目的を共有する」という部分に重点を置き、その在り方を見つめ直し、3年目に改善を図った。

具体的には、亀っ子応援隊会議において、子どもたちに身に付けさせたい資質・能力について、そしてその力の育成のためにそれぞれの立場でできることは何かなどを話し合い、「社会に開かれた教育課程の編成に向けた取組」を考えた。12月に行われた「地域連携教育研究発表会」で、地域住民や保護者、市内の教職員に、その取組の成果を紹介できたことは、今後の地域連携を発展させる上で、大きなきっかけになったと考える。

**校内におけるメディアコントロールの取組  
学校経営コース  
藤本 優(新潟市立五十嵐小学校)**

本実践は、①健康ウィークを通して、児童が自らの生活習慣を主体的に見直し、日常的な取組にするための方策を見出すこと、②学校組織の中におけるビジョン部の位置付けと働きを見直し、それらが互いに効果を与え合う活動となるような学校経営の方法を明らかにすることを目的とした。健康ウィークに関しては、児童や保護者に対して事後の振り返りアンケート実施や振り返り記述欄を設けること、また児童に対して個別に声かけを行うことで、家庭と連携して、メディアコントロールに対する児童の意識付けを図った。組織運営に関しては、新たにビジョン主任会を設置し、ビジョン部同士の横の繋がりを活かしながら、各ビジョン部の活動の活性化を図った。健康ウィークの結果分析から、取組による児童のメディア利用時間の改善は図られたがその日常化にはまだ課題があることと、今後に向けて、家族を巻き込んだメディアコントロールの取組の必要性が明らかになった。組織運営においては、ビジョン主任会の設置を通して、各部の運営状況の共有や次年度に向けた目指す姿や育成すべき資質・

能力の検討を行ったことで、3つの部が連携し、同じベクトルで教育活動を推進する組織の在り方の方向性を明らかにすることができた。

昨年度の成果と課題から、今年度は次のような実践を行おうと考えている。

- ①全学年におけるネットモラル講演会の実施と、年間を通した生活習慣(メディアコントロール)振り返りの機会を設ける。
- ②新しい教育目標とビジョン部で目指す子ども像を擦り合わせながら、健康ウィークの在り方を再考する。
- ③ビジョン部で連携した取組を実践していくことで、ビジョン主任会を学校組織の中核として機能させていく。

2年間、教職大学院で学ぶ機会をいただき、学部生の時とは全く違った視点で教育を考える日々である。学んだことを自分自身と学校現場に還元できるように、これからも精進していきたい。



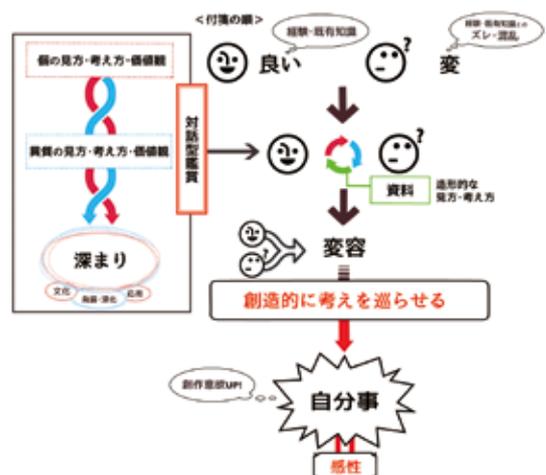
## 教職大学院生「1年目の実践報告」

**創造的に考えを巡らせる中学校美術の在り方  
教育実践コース  
飯沼 沙知子**

教職大学院に入学して1年が経過しました。私が教職大学院を志望した理由は授業力の向上でありました。教職大学院で学びを深める中、生徒の資質能力の向上を図るための授業力には、理論が大きな支えとなっていることを日々痛感しています。理論を深めることにより、子どもだけでなく私自身の美術教科に対する向き合い方、他教科の見え方に変化が生じました。新学習指導要領の美術では創造的に考えを巡らせることを重視しています。本研究の出発点はその「創造的に考えを巡らせる」ということ、現場経験から鑑賞の授業が最低限でしか行われにくいということ、美術や表現活動に対して軽視の空気を感じることがありました。それらを課題とした時に「対話型鑑賞法」に着目しました。1980年代半ばに始まったとされる従来の対話型鑑賞法にアレンジを加え、より創造的に考えを巡らせられるよう、「造形的な視点」を定めた上で実践授業を行いました。

研究を進める中で、生徒が作品制作や鑑賞の行為を自分事と捉えている(創造的に考えを巡らせている)

か否かで授業に取り組む姿勢や学びの深度が変わることに気づきました。私は今まで生徒が興味を惹く教材を選ぶことに重視する傾向がありましたが、興味よりも自分もしくは自分に近いものを作品から見出す手段こそが生徒の学びに向かう力を向上させると実感しました。美術というものを自分の生きている世界とは違う額縁の中の世界と思うのではなく、自身の生活に息づいたものだと感じさせる手立て、作品に当事者意識を持つこと、それこそが美術を教えるのではなく、美術で教える行為なのだと思います。

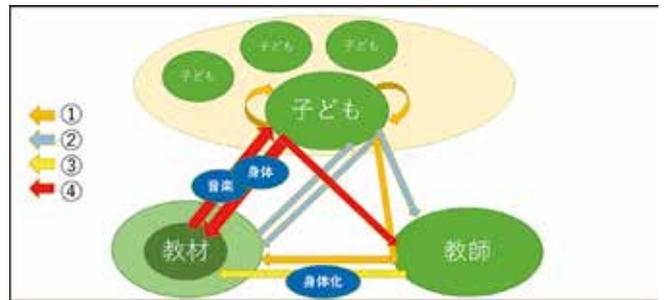


授業における対話の成立について  
教育実践コース  
松本 晴菜

大学院1年次の研究では、小学校音楽科鑑賞授業において、以下の3つを明らかにすることを目的とした。①「対話」そのものの意味について、また音楽科における「対話」について明らかにすること。②「体を動かす活動」を通して、どのようにしたら「対話」が成立するのか明らかにすること。③音楽科授業鑑賞領域における、「子どもと教師」、「子どもと教材」、「教師と教材」、「子どもと子ども」などの、それぞれの「対話」の関係性を明らかにして図式化すること。

文献調査より、「対話」について、「自分とは異なる考えをもつ人・もの・こととのやりとりの中で、考えが広がったり深まったり、当初持っていた考えが変わったりするもの」とであると定義した。さらに、音楽科授業において、「子どもと教材」という双方向の関係性が重要であると考えた。また、授業分析より、「体を動かす活動」を取り入れることで、音楽と子どもが一体化した姿が見られた。音楽に対する自分の考えが深まったと考えられることから、「対話」が成立したといえる。「体を動かす活動」が「対話」の成立に有

効であると考えた。また、「対話」が成立している場面を抽出し、「対話」の関係性をまとめた。「子ども」、「教師」、「教材」のやりとりの順序性を含めた、現時点での「対話」の関係性を見出すことができた(下図)。



2年次では、1年次の授業実践の課題を明確にし、「対話」の関係性を更新したい。そして、音楽の楽しさやおもしろさを味わって聴くことができる、感性豊かな子どもを養っていきたい。



集まれ!  
卒業・修了  
5年目までの  
同窓生

# 「カミングホームデイ」バージョンアップ

4年目を迎える「カミングホームデイ」。年々参加者が増えています。本年度もさらにバージョンアップして実施します。奮ってのご参加をお待ちしています。

- |         |   |  |     |   |   |
|---------|---|--|-----|---|---|
| 1 日     | 時 | 令和2年11月14日(土)  | 4 会 | 費 | 無 料   |
|         |   | 12:00~14:00  | 5 内 | 容 | ・同窓会長あいさつと学部長・教育実践学研<br>研究科長による激励の言葉                        |
| 2 会     | 場 | ホテルサンルート新潟   |     |   | ・昼食会  |
| 3 参加対象者 |   | 平成28年3月~令和2年<br>3月に新潟大学教育学部を<br>卒業した皆様並びに教育実<br>践学研究科を修了した皆様 |     |   | ・卒業生・修了生と卒業後の活躍を共有し、<br>大学や同窓会への要望等を寄せていただき、<br>参加者の親睦を深める。 |
|         |   |  |     |   | ・同窓会副会長、閉会のあいさつ   |

(広報部 高橋新二)

新型コロナウイルス禍による「ピンチ」を「チャンス」と捉え、前を向いて、様々な改善を図りながら教育活動に取り組んでいきたいと思う。子どもたちの笑顔のために。



## 花鳥風月

新型コロナウイルス感染症防止のため、教育活動に制限がかかる中で、令和2年度が始まった。  
三月から一斉臨時休校となり、年度末に実施予定であった様々な教育活動が実施できなくなった。ただ、勤務校では、卒業式は縮小という形ではあったが実施できた。新年度の入学式も同様であった。節目の大きな二つの式が実施できたことを大変嬉しく思う。

学校現場において、感染防止にどう対応し、教育活動に取り組んでいくか、大きな「ピンチ」だと思っていたところ、校長先生から一編の詩を教えていただいた。詩人の山本よしきさんの「ピンチの裏側」という詩である。この詩には「ピンチはチャンス どつしりかまえて ピンチの裏側に用意されてる チャンスを見つけよう」と綴られている。



(以下敬称略)

研修部の「同窓生の集い」に代わる特別企画「先輩を訪ねて」をお届けします。今年度の「同窓生の集い」にお招きする予定であった新潟市教育委員会 教育長 前田秀子さんを訪ねて、古町ルフル四階 新潟市教育委員会 教育長室を訪問しました。新潟市教育委員会は五月に白山浦庁舎から移転したばかり。真新しい教育長室でお話を伺いました。前田教育長は、新潟大学教育学部第二十八期卒業生です。

毎年恒例「同窓生の集いのお誘い」に代えて

**特別企画**

**先輩を訪ねて**

新潟市教育委員会  
教育長 前田 秀子さん  
(第二十八期卒業生)

研修部長 小林 由希恵

小林

「教育長はどちらの校舎で学ばれたのですか？」

前田教育長

「私は長岡分校でした。当時、長岡分校の他に、新潟本校と高田分校がありました。長岡分校の小学校教員養成課程はA組とB組の二クラスあり、教育学部同窓会長の白杵くんとは、クラスは違いましたが一緒にしました。」

小林

「長岡分校で学ばれたのですね。当時の一番の思い出を教えてください。」

前田教育長

「硬式テニスサークルに所属していて、勉強している時間より、テニスコートにいる時間が長かったように思います。当時、長岡には、教育学部の他に工学部もあり、サークルは一緒でしたし、交流も盛んでしたよ。」

小林

「一緒に学ばれた方々と卒業してからも交流はありますか？」

前田教育長

「特に、長岡分校と一緒に過ごした仲間とは仲が良く、長岡分校の出身者を中心に同窓会を企画し、これまで五回開催しました。平成三十年に開催した時も、九十人ほど集まりました。」

小林

「現在、教育委員会でも、コロナ対応として様々な案件に対応いただいていると思いますが、実際に現場で子どもたちと向き合っている後輩にメッセージをお願いできますか？」

前田教育長

「今年度もこれまでに何校か学校訪問させてもらっていますが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、細かいところまで対策が施されていて、先生方はすごいなと感じています。コロナの怖さは、病気自体の怖さに加えて、周囲からの偏見やいじめにもあると思います。各学校で、子どもたちに対して丁寧な対応がなされていることを、嬉しく心強く思っています。」



長岡分校 正門からの校舎風景。(閉校記念誌より)  
1951年～1953年(昭和26年～28年)にかけて、長岡市学校町の新潟大学工学部(長岡高等工業学校)に隣接して建築された。この建物は長岡分校の廃止まで30年間、使用された。長岡分校では、昭和34年の4年制施行後は、小学校課程(81名)・中学校課程(45名)の1・2年次が学び、3年次から新潟本校に移った。

小林

「私たち後輩に、温かいメッセージをありがとうございます。」

前田教育長

「現在のような状況下では、思うようにならないことはたくさんありますが、ぜひ、そうした中でも何ができるのか考えることを楽しんでください。新しい気づきや可能性が見つかるかもしれません。明るく、前向きに！」



終始、穏やかに笑顔で語る前田教育長のお話に聞き入り、あつという間に時間が過ぎてしまいました。私たち後輩への温かなエール、そして前向きなメッセージに背中を押していただきました。続きは、来年度の「同窓生の集い」で伺いたいと思います。皆様、どうぞ、ご期待ください。